

注* 『明実録』万曆三十年十月甲午の条に関連の記事がある。

1-26-12

世子尚寧の、皇帝と皇太子への慶賀謝恩のため王舅毛繼祖等を遣わす符文（一六〇二、九、□）

琉球国中山王世子尚（寧）、慶賀、謝恩等の事の為にす。

今、特に王舅毛繼祖を遣わし、長史蔡朝信等と共に、表箋各一通を齎捧せしむ。小船一隻に坐駕し、全光金靶鞞腰刀二把・金結

束紅漆鞞金起沙魚皮靶腰刀二把・細嫩蕉布二十四・黄土夏布二百

匹・紅花二百斤を装載して京に赴き進賀す。又、全光銀靶鞞腰刀

二把・銀結束紅漆鞞銀起沙魚皮腰刀二把・線穿鉄甲二領、盛全・

細嫩練光蕉布二十四・水墨画土扇二百把は正位東宮に進賀す。又、

鍍金銅結束紅漆鞞靶腰刀二把・鍍金銅結束黑漆鞞靶腰刀二把・鍍

金銅結束黑漆貼金鞞黑漆鞍刀四把・鍍金銅結束黑漆貼金鞞黑漆

靶鎗六柄・土白紙一百束・土夏布二百匹もて京に赴き謝恩す。所扱

りて今齎捧する方物は、仍お礼部に赴き告申して進収せしむる外、

今、洪字第二十七号半印勘合符文を給し、通事梁基等に付し、収

執して前去せしむ。如し沿途の経過の各該地方の関津把隘の去処

及び駅遞・巡司等の衙門の官吏は、往廻して彼に到るに遇わば、

即便に放行し、留難して遅候するを得しむる母れ。須らく出給に

至るべき者なり。

今開す 赴京の

王舅一員 毛繼祖 人伴一十名

長史一員 蔡朝信 人伴一十名

使者一員 馬成竜 人伴五名

通事一員 梁基 人伴二名

存留在船通事二員 蔡崇貴 王立威 人伴四名

管船火長・直庫二名 蔡徳 嘉尼

右の符文は通事梁基等に付し、此れに准ぜしむ

万曆三十年（一六〇二）九月 日給す

符文

注* 『明実録』万曆三十二年正月己未の条に関連の記事がある。なお、

本文書以降の符文には、火長・直庫名が付記される。

(1) 蔡崇貴 久米村蔡氏（平川家）の初代。福州西門外の人。琉球への帰化は嘉靖年間（嘉徳堂規模帳）『市史宝案抄』二七八頁。

(2) 直庫 管船直庫ともいう。中国および東南アジアへの遣船の乗員の職名の一つ。久米村系ではない人を任じた。中国船における直庫の職掌については、万曆四十五年頃刊の張燮『東西洋考』巻九、舟師考に「其司戰具者、為直庫」とあり、徐葆光『中山伝信録』巻一、封舟に「正副直庫二人、主大帆操

花、天妃大神旗、又主装載」とある。松浦章「長崎来航唐船の経管構造について」(『史泉』四五、昭和四七年九月)は、『瓊浦偶筆』に「直庫、主装載物件」とあり、『唐船蘭船長崎入船便覧』に「直庫太鼓役」とあり、『赤嵌筆談』に「擇庫一名清理船艙」とあることを紹介している。

日本では『戊子入明記』に、応仁二年(一四六八)の遣明船三隻中の一号船に「知庫」三郎太郎の記名がある(小葉田淳『中世日支通交貿易史の研究』刀江書院、昭和四四年復刊、二二四・二二七頁)。

琉球国における直庫の職掌は未詳である。

(3) 日 執照(三二一一)によれば、初四日。

1-26-13

世子尚寧の、進貢謝恩のため長史鄭俊等を遣わす符文

(二六〇五、一〇、二〇)

琉球国中山王世子尚(寧)、進貢、謝恩等の事の為にす。

今、特に長史・使者・通事等の官の鄭俊等を遣わし、表箋文各一通を齎捧せしむ。海船一隻に坐駕し、馬四匹・生硫黄一万斤・

金結束黒漆鞘金起沙魚皮靶腰刀二把・銀結束黒漆鞘銀起沙魚皮靶

腰刀二把・鍍金銅結束黒漆鞘沙魚皮靶腰刀二十把・鍍金銅結束黒

漆鞘袞刀一十把・鍍金銅結束黒漆鞘鎗一十把・細嫩練光蕉布二十

匹・紅花二百斤・土扇一百把を装載して京に赴き、進貢し謝恩す。

所廻りて今齎捧する方物は、仍お礼部に赴き告申して進収せしむ

る外、今、洪字第三十六号半印勘合符文を給し、都通事阮明等に付し、収執して前去せしむ。如し沿途の経過の各該地方の関津把隘の去処及び駅通・巡司等の衙門の官吏は、往廻して彼に到るに遇わば、即便に放行し、留難し遅慢するを得しむる母れ。須らく出給に至るべき者なり。

今開す 赴京の

長史一員 鄭俊 人伴一十名

使者一員 毛鳳朝 人伴五名

都通事一員 阮明 人伴三名

存留在船使者二員 毛喜 馬三魯 人伴四名

存留在船通事一員 林世重 人伴二名

管船火長・直庫二員 鄭徳 嘉尼

貢謝の方物を除く外、附搭の土夏布二百匹

右の符文は都通事阮明等に付し、此れに准せしむ

万曆三十三年(一六〇五)十月二十日給す

符文

注*『明実録』万曆三十四年九月癸未・十月壬子の条に関連の記事がある。

(1) 阮明?—一六〇七年。久米村阮氏(濱比嘉家)一世。福建漳州府竜溪県の人。万曆十九年来琉、三十五年の進貢のあ